

36 年度下期岡山県農業観測

畜産物価格のみとおし

県農林部ではこの 10 月初め昭和 36 年度下期（10 月～3 月）の農業観測を発表しましたがその概要はつぎのとおりです。

見とおし

- 牛 乳 若干弱含み
- 鶏 卵 ほぼ前年同期程度
- 肉 豚 高かった前年同期より大巾安
- 肉 牛 前年同期よりやや高い
- ブロイラー 全体として前年同期よりやや高い
- 子 牛
- （乳牛）引続き堅調
- （和牛）めすは値上がりぎみ おすは横ばい
- 子 豚 前年同期より大巾安

地としての地位を確立しつつある。

(エ) 又、生産量の増加に伴って加工向の生乳量も 9,690 トンと著しく増加し対前年比 157%程度を示している。

(オ) 乳価については県の適切な乳価指導によって、4 月～8 月の 5 ヶ月間の平均農家平均 10 k g 当 311.7 円と極めて好調に推移した。

乳 価 の 比 較 表 (1kg 当農家手取)

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月
35 年	24.00	24.00	24.00	25.60	25.60	25.60	26.67	26.67	26.67
36 年	25.60	27.73	28.26	29.86	30.93	30.93	32.00	32.00	30.40

備 考 何れも、うち0.52円は乳価安定基金として県酪産へ積立てる。

品目別の価格の見通し

1、牛 乳

ア 経 過

(ア) 昭和 36 年上期の生産量（1 月～8 月）は、24,360 トンで対前年比 134%の伸長を示し、全国的にみて最優位である。地域別にみると、美作、備中の増加率は依然として順調であって更にその他の地区の伸長率も漸次好転している。

県外からの移入（4 月～8 月）は 3,115 トンで、前年に比して 23 倍と著しく増加している。

(イ) 一方県内飲用向の牛乳供給量は上期（4 月～8 月）8,990 トン、対前年比 113%程度であったがその後半にいたり順調に推移し、対前年比 120%となった。また、県内生乳の総供給量に対する飲用向消費割合は 40%でほぼ安定したバランスを保っている。

なお、今年の著しい現象は、いわゆる色物と称されているフルーツ牛乳、コーヒー牛乳等の消費が極めて好調であったことである。

(ウ) 県外（阪神）への出荷も逐年増加の一途を辿り上期（4 月～8 月）6,570 トン、対前年比 158%で移入量を大きく上廻り阪神の有力な原乳供給

イ 見 通 し

(ア) 下期の生乳生産量は積極的な酪農振興諸施策の推進と農家の企業家への意欲によって対前年比 130%以上の増加率は充分期待できる。

(イ) 下期の飲用向の消費量は不需要期に入るのでその伸長率は鈍化すると思われるが対前年比は 110%は維持するであろう。

(ウ) 県外への出荷も同様不需要期に入るので若干減少するが従来よりみて対前年比 150%を下廻ることはないであろう。

(エ) 随って加工向供給量は増加するが、需給のバランスが崩れることはないと考えられる。

(オ) 乳価は昨年来上昇の一途をたどってきているが、以上の需給関係からみて、若干弱含みに推移するものと思われる。

2、鶏 卵

ア 経 過

(ア) 35 年度の全国の鶏卵生産は 101 億 9,000 万個で前年度より 23%増加しておりこれは集団および大羽数飼育などの養鶏経営が普及したためとみられる。

(イ) 県内本年 6 月の成鶏めす羽数は 199 万 1,000

岡山畜産便り 1961. 11・12

羽でこれは前年同月の21%増であり、また全国35年度下期の成鶏めす羽数も前年同期を30%上廻る記録的な増加をみている。

県内春びな(36年1月～6月)の発生羽数は鑑別めす、554万羽で前年同期比118%であった。

(ウ) 36年4月～6月の消費は生産増加による値下がりもあって家庭およびマヨネーズ向けは順調な伸びをみせ、とくにマヨネーズ向けは全国で前年同期の2倍の5,500トンに増加した。しかし輸出は前年と同程度にとどまった。

(エ) 35年度下期の農村価格(岡山県平均)は、全国的な生産の著増にもかかわらず消費の増加で前年同期より6%安い174円(1kg当り)にとどまった。

36年上期の農村価格は4月150円から、5月135円前年に比べ8%、14%安と33年以来の安値をみせたが、その後消費の増加や夏期の暑さのための減産から8月9月には191円(102%)、200円(111%)ともち直し、期間平均では161円で前年同期より4%の安値にとどまった。

イ 見 通 し

(ア) 下期の成鶏めす羽数は、上期の卵価安によるだ鶏の整理もあるが、春びな発生増加を考慮すると、前年同期を上廻るものとみられる。

したがって、鶏卵の生産は前年同期のような著るしい増加はみられないとしても、かなり増加するものとみこまれる。

(イ) 下期の鶏卵の需要は、加工用についてはひきつづき大巾に増加するものとみられ、また一般家庭用向け消費も増加が期待される。

(ウ) 下期の鶏卵の農村価格(岡山県平均)は、ほぼ前年同期(1kg当り174円)程度であろう。

3、内 豚

ア 経 過

(ア) 35年度の全国の豚肉供給は前年度の13%減であった。この生産減による高値から肉豚の飼育頭数は、全国で35年2月の192万頭(前年対比15%減)が、36年2月260万頭に増加し、さらにいちじるしい伸びをみせつつある。また、本県の飼育頭数も35年5月1万6千頭が、36年

2月1万8千頭、36年5月2万3千頭(前年対比143%)に増加している。

36年5月の飼育の飼育頭数を地域別にみると、関係分の前年同月対比指数は中国166、四国177、近畿149である。

(イ) このため、今年の4～6月の県内と殺頭数は前年同期を16%上廻る3,486頭で、また同期間の全国豚枝肉生産も23%上廻る4万5千500トンとなっている。

(ウ) 家計における豚肉の需要は全国的に相変らず強く、36年4月以降も前年よりかなり増加したものとみられる。

最近大手企業の進出による食肉加工施設の新増設がおこなわれている。

(エ) ア) 35年度の肉豚の農村価格(岡山県平均)は213円(生体1kg当り)で前年を大きく上廻った。しかし36年4～9月は、全国的な生産増加から4月の180円から5月168円と下がり、その後加工需要の増加から持ちなおし、9月には180円となったが、なお前年にくらべ7月22%、9月32%安であった。

イ) 35年度の豚肉の卸売価格(大阪中値平均)は、前年度より19%高の325円(1kg当り)で戦後最高となった。

36年4月～8月は、4月の267円が7月には280円と値上がりしたが、8月には269円に再び下向きとなり、8月で前年対比27%安であった。

これは35年8月の大阪と畜場でのと殺頭数が6千3百頭であったのに対し、36年8月には1万2千1百頭と2倍になっていることからもうなずける。

イ 見 通 し

(ア) 下期の肉豚のと殺頭数は、春子の増加および子豚の導入意欲がおとろえていないことを考察すると、前同期にくらべ大巾に増加するものとみられ、37年に入ってとくに多くなるものとみられる。

(イ) 下期の豚肉に対する需要は、一般家庭用は、前年同期よりかなり増加するものとみられまた

岡山畜産便り 1961. 11・12

食肉加工用もひきつづき大巾な増加をみせるものとみられるということ。

(ウ) 下期の肉豚の農村価格(岡山県平均)は、7月の価格(生体1kg当り178円)より値下がりぎみに推移し、下期平均としては異常に高かった前年同期の202円よりかなり下廻る程度とみられている。

4、肉 牛

ア 経 過

(ア) 35年度の全国牛肉生産量は14万1,000トンで前年より6%減少し、輸入を含めても牛枝肉の供給は前年度より3%減少であった。

また、36年4～6月の牛枝肉生産は前年同期と同程度の3万1,500トン輸入も前年程度の1,000トンであった。

(イ) このような牛枝肉の生産の減少は、牛枝肉生産の約80%をしめる役肉用牛の減少もあるが、繁殖用に保留される傾向も見られるのと殺向けの出廻りが停滞しているためとみられる。

(ウ) 牛肉の需要はひきつづき好調で、35年度の都市世帯の購入金額(1世帯当り)は前年度より14%増加した。36年4～6月もかなり増加したものとみられる。

(エ) ア) 36年度上期の肉牛の農村価格(岡山県平均)は、前年同期を6.9%上廻る211円(去勢牛、めす、おす平均生体1kg当り)となり、近年の最高の水準に達した。また、36年4月204円に対し、9月には225円で10%の値上りをみせている。

イ 見 通 し

(ア) 下期の肉牛のと殺頭数は、全国的にみて乳用牛のと殺増があるとしても、役肉用牛の繁殖意欲の高まりからと殺の増加は期待できないであろうから、下期の牛肉生産は前年同期を下廻るものとみられる。しかし輸入もみこまれるので下期の牛肉の供給は前年同期と大差ないであろう。

(イ) 下期の牛肉の需要はひきつづき強いものとみられる。

(ウ) 下期の肉牛の農村価格(岡山県平均)は、豚

肉の供給増を考慮に入れても、前年同期の197円(去勢牛、めす、おす平均、生体1kg当り)よりかなり高い水準を維持するであろうか。

5、ブロイラー

ア 経 過

(ア) 35年度上期はかなりの水準(215円—大阪業者仕入値1kg当り)を維持していたブロイラーは、下期の終りの36年2月以後値下がりを受け、5月には147円に暴落し、34年夏以来の安値となった。その後8月には200円にもどしたものの4月から8月の平均は168円で前年同期にくらべ19%の値下がりとなった。これは5月以降採算割れや、暑さのため生産が減少したためとみられる。

(イ) 県産ブロイラーの主な出荷先である阪神地区への36年4月～8月までの各県推定総出荷量は、1ヵ月平均24万5千羽で前年同期にくらべ123%と大巾な増加を示しており、このうち岡山県からの出荷は3万5千羽14%程度である。

(ウ) 35年の全国都市1世帯あたり食鶏の消費量は年間19kg程度で、前年にくら23%の増加を示し、引続き家庭や業務用の食鶏消費は伸びているものとみられる。

イ 見 通 し

需要は引続き伸びるものとみられるので、夏の安値の影響もあって供給の不足から年末の需要期には、かなりの高値も考えられるが、全体としては昨年の同期平均(大阪仕入値197円)よりやや高い程度であろう。

6、仔牛(乳牛)

ア 経 過

仔牛(乳牛)の農村価格は、35年度下期以降次第に値上がりし、36年4月には前年同月より20%の高い5万5,000円となり32年度以降の最高となった。

イ見通し

下期の仔牛の導入意欲は強く、農村価格はひきつづき堅調であろう。

岡山畜産便り 1961. 11・12

7、仔牛（和牛）

ア 経過

(ア) 31年以降値上がり傾向にある仔牛（和牛）の農村価格（岡山県平均）は、36年度上期には前年同期よりさらに27%高の50,396円（生後4～6か月めす1頭当り）となった。

36年4月～9月の農村価格（岡山県平均）は4月48,750円、7月51,375円、9月53,875円と値上がりが続き、前年同月に比べ23%高であった。

これは、全国的に仔牛の生産が減少しているのに加え、35年の牛肉価格の高値で、仔牛に対する需要が強まったためとみられる。

(イ) 和牛仔牛の県内生産は、35年中31,167頭で、前年対比1%減で、ほぼ横ばいであった。一方県外移出は35年度中14,700頭で、前年に比べ11%減であったが、これは県内での導入意欲が高まったことや、品不足からの高値のためとみられる。

イ 見通し

仔牛（和牛）の導入意欲は強いとみられるが、成牛に比べ割高となっていることもあるので、下期の子牛の農村価格（岡山県平均）は、9月の価格（めす53,875円、おす34,500円）よりめすは値上がりぎみ、おすは横ばい程度であろう。

8、仔豚

ア 経過

(ア) 仔豚需要の増大から仔価の農村価格（岡山県平均）は、35年9月に6,550円ヨークシャー生後（40～60日めす1頭当り）の最高を記録したが、36年4月は4,875円で前年同期より16.5%高に止まった。しかし春仔の生産増加から7月には3,750円と大巾な値下がりを示した。

(イ) 県下の36年5月の繁殖用めす豚飼育頭数は、前年同期に比し152%3,500頭と推定され、したがって種付頭数もかなり増加したが、本年夏の高湿から以外に死産、流産等が多く秋仔の生産はその割合には増加しないものと見られる。

イ見通し

仔豚の導入意欲はなおかなり強いものとみられ、

全国的に繁殖用めす豚の頭数が大巾に増加していることもあり、下期の仔豚の農村価格（岡山県平均）は7月の価格（3,750円）よりさらに値下がりし、前年同期（5,319円）より大巾に安いのであろう。